

虚構の共同性

——反射的指示理論と語用論的分析——

成瀬 翔⁽¹⁾

はじめに——空名の指示の問題

言語哲学において固有名や確定記述などの単称名辞の指示は、最重要問題として論じられてきた。個体に対する命名 (naming) として固有名と指示対象の結びつきを説明する立場 (指示の因果説) を取る場合、「シャーロック・ホームズ」や「サンタクロース」のような指示対象を欠く名前、すなわち「空名 (an empty name)」が重大な難問となる。すなわち、「シャーロック・ホームズは探偵である」のように空名を含む文は、指示対象が存在しないため、真理評価を行うことはできず、命題を表現することはない。それにもかかわらず、「わたしはシャーロック・ホームズが探偵であると信じている」のような空名を含む文を使って、話者は、信念を報告できるように思われ、また、聞き手はそのような文を理解し、話者に信念を帰属することが可能であるように思われる。しかし、このような空名が何を指示し、空名を含む文においてどのような働きをするのかを言語表現とありふれた実在物とのあいだの意味論的關係に倣って説明するのは困難である。

このような問題を解決するために提案される方法の一つは、虚構の対象をなんらかの意味で存在するとみなし、実体化する方針である⁽²⁾。この「実体化戦略」とは対照的に、空名の使用の場面をより細かく分析し、説明を試みる語用論的立場も提示されている。しかし、この語用論的立場は次の2つの課題に回答しなくてはならない。

- ① 空名を含む発話の語用論的内容が生成されるメカニズムの解明
- ② 空名を含む発話の語用論的内容が生成されるプロセスの解明

本稿では、これらの課題を克服するために、ケンダル・ウォルトンが提唱するメイクビリーヴ説 (theory of make-believe) をジョン・ペリーのネットワーク理論と接続することを提案したい。

I ウォルトンのメイクビリーヴ説——ごっこ遊びと虚構世界

本節では、ウォルトンの *Mimesis as Make-Believe* (邦訳『フィクションとは何か』) の議論を再構成し、メイクビリーヴ説を素描する。ウォルトンの基本的アイディアは、次のようなものである。ある話者が「今晚サンタクロースが来る」と発話するとき、サンタクロースは実際には存在しないため、「サンタクロース」という名前はいかなる対象も指示しないが、話者は「ふりの内側で (within the pretense)」サンタクロースが存在し、それを指示するふりをしている⁽³⁾。このような文を使用する話者は、フィクションとして (fictionally) 真であると真剣に主張しているのである。

ウォルトンはこのような「ふり」を「メイクビリーヴ (make-believe : 信じることにする)⁽⁴⁾」という概念によって説明する。たとえば、子どもたちが泥団子をチョコレートとみたてるごっこ遊び (a game of make-believe) を考えよう。この例では、子どもたちは自分たちがお菓子屋さんであるというふりをしており、公園の砂場で泥を捏ねた土塊はチョコレート、あじさいの葉は皿、等々にみたてている。もし、ある子どもが泥団子を葉っぱのうえに乗せれば、ごっこ遊びの中ではお菓子屋さんがチョコレートを皿に盛り付けたことになる。現実には泥団子が葉っぱのうえに置かれているに過ぎないが、このときチョコレートが皿に盛り付けられているということは、このごっこ遊び (メイクビリーヴの遊び) 中で虚構として真なのである。こうやって「このチョコレート」や「あのお皿」といった虚構の事物を指す単称名辞を用いた文の真偽を定める立場を、メイクビリーヴ説と呼ぶことにする⁽⁵⁾。

ここで注意しなければならないのは、あるごっこ遊びが行われるときに、その参加者は自由にふるまえるのではないということである。現実世界における

ある特定の事物が、メイクビリーヴの内側で（つまり、ごっこ遊びの中で）何が真であるかを決定するのである。この現実世界の事物をウォルトンは「プロップ（prop：小道具＝支柱）」と呼ぶ⁽⁶⁾。われわれの例では、プロップは泥団子という物体、あじさいの葉という物体、そして泥団子をあじさいの葉のうえに乗せるという事実である。このごっこ遊びにおいては、このようなプロップが与えられたとき、ごっこ遊びに参加する者がどのようなふりをしなければならないか、を決定する規則が存在する。すなわち、「生成の原理（principles of generation）」と呼ばれる規則である⁽⁷⁾。この泥団子＝チョコレートごっこの例では、お菓子屋さん役の子どもが泥団子をあじさいの葉のうえに置いた場合には、そのごっこ遊びに参加する者たちはチョコレートが皿に盛りつけられたふりをすることが適切であるということプロップと生成の原理が決定するのである。そして、プロップと生成の原理は、チョコレートが皿に盛りつけられたということがごっこ遊びの内側で真であるということ決定する機能を果たす。

ウォルトンのメイクビリーヴ説では、話者が物語の内容やフィクションのキャラクターについて言明する場合にも、この上述のごっこ遊びと同様の仕方で解釈される。つまり、われわれは、フィクションの物語が現実の真なる説明（true account of reality）である、というふりをしているのである。たとえば、シャーロック・ホームズについて話す場合、われわれはそのような人物が存在し、天才的な推理力をもち、ベーカー街 221B に下宿する、などのふりをする。つまりわれわれは、「シャーロック・ホームズ」という空名が指示対象をもち、それら名前を含む文が命題を表現し、それらの命題を信じる、というふりをしているのである。このようなごっこ遊びでは、コナン・ドイルの創作したホームズ物小説がプロップの役割を果たす。そして、プロップと生成の原理は、ごっこ遊びに参加する人がどのようなふりをしなければならないか、そしてごっこ遊びの内側でどのようなことが真なのかを決定する。著しくプロップと生成の原理から逸脱したごっこ遊びは、通常は正当なものとは認められない⁽⁸⁾。

このように、ある話者が「シャーロック・ホームズは探偵だ」のような文を使用するとき、その人はシャーロック・ホームズの存在を含むホームズ物語の解釈という一つのごっこ遊びをしているのである。その人がそのごっこ遊びの内側で使用するならば、「シャーロック・ホームズ」という空名は虚構として対象（シャーロック・ホームズ）を指示し、そのような名前を含む単称文も真なる命題を表現するふりをしているのである。

ここで強調しなければならないのは、ウォルトンが、虚構的对象やその対象にかかわる虚構的命題ないし事態からなる虚構世界を、現実世界と同様の実体性を有していない、とみなすことである。ウォルトンのメイクビリーヴ説では、シャーロック・ホームズは、その対象について記されたコナン・ドイルの小説をプロップとして用いる鑑賞ごっこ遊びにおいて、生成の原理に従うすべてのメイクビリーヴ（虚構としての信念）の内側においてのみ存在する。ある事態が虚構として成立する虚構世界とは、プロップと生成の原理から個々人が生み出す、可變的ないわば「プラグマティカル」な世界なのである。

このようにウォルトンの理論は、ふりとごっこ遊びという概念によって、空名を含む発話の語用論的内容が生成されるメカニズムを説明することができる。しかし、ウォルトンの理論は語用論的内容が生成されるプロセスを説明するための言語哲学的構成を欠いている。つまり、ウォルトンの理論に即して考えれば、われわれがごっこ遊びをするときに依拠するプロップの内実が問題となるのである。以下では、この問題を明確にするために、ペリーの社会的ネットワークの理論と接続することを試みよう。

II ペリーのネットワーク理論

ペリーは『指示と反射性 (*Reference and Reflexivity*)』(1st ed. 2001/2nd ed. 2012)において、ある対象を起源としてもつ名前の使用の社会的ネットワークの理論を描き出す。この見取り図の下では、名前の使用者は、これまで形成されてき

たネットワークに参入するか、もしくは新しくネットワークを形作る起点となる。

この着想そのものは、クリプキが提示する名前の因果説とほぼ同一のものと
言えるだろう。問題となるのは、ネットワークの起源となる対象をもたない空
名のケースである。このようなケースに対処するために、ドネランは「ブロッ
ク (block)」という概念をもちいて次のように空名の使用を説明する。

「(指示するという意図をとまなう) 名前の使用の歴史的説明が...いかな
る指示対象も同定することを排除する出来事で終わる場合、わたしはそれ
を歴史における「ブロック」と呼ぶ。」 (Donnellan 1974, p. 23)

たとえば、サンタクロースの存在を信じていた子どもが、ある時点で「サンタ
クロースは存在しない」と言われて、以後はサンタクロースが虚構であることを
知ったような、同定される指示対象を排除する出来事で終わる場合、ドネラ
ンは歴史内のブロックと呼ぶ。つまり、「サンタクロース」という名前の導入
から、「サンタクロースは存在しない」という言明までが、ブロックである。
この概念を用いて、ドネランは次のように存在否定言明を考える。

「N がある個体を指示するという意図をとまなう叙述文において使用
された固有名である場合、「N は存在しない」は、これらの使用の歴史
がブロックに終わる場合、かつその場合のみ真である。」 (*ibid.*, p. 25)

ドネランは指示の「歴史的連鎖 (historical chain)」からブロックを説明する。
しかし、ドネランは歴史的連鎖の内実には踏み込まず、それ以上の分析は行わ
ない。ペリーはドネランの歴史的連鎖を「ネットワーク」と読み替え、その詳
細な記述を試みる。ペリーの説明では、ネットワークは起源となる対象から出
発する。そして、ネットワークは「条件付き共指示 (conditional co-reference, *i.e.*
coco-reference)」の連鎖からなる。

ここで注意が必要なのは、条件付き共指示が、通常の「共指示 (co-reference)」
から区別されることである (Perry 2012, p. 172)。共指示は次のように定式化可
能である。

(Co-R) 両方の発話が指示し、かつ同一のものを指示するならば、後者の発話は前者の発話と共指示である。

他方、条件付き共指示は次のように定式化可能である。

(Coco-R) 両方の発話が指示し、かつ同じものを指示するような条件があれば、後者の発話は前者の発話と条件付きに (*conditionally*) 共指示である。

話者が先行する指示と共指示することを意図し、言語的規約に従う場合のみ、条件付き共指示は可能となる⁹⁾。

ペリーのネットワークの理論において重要なことは、あるネットワークが必ずしも実在の対象への指示から始まる必要はないということである。たとえば、コナン・ドイルがシャーロック・ホームズを創作したときのように、ネットワークは発明の行為 (*act of invention*) をその起源としてもつことができる。そのようなケースでは、ネットワークはブロックをもつ。そして、そのようなネットワークでは、条件付き共指示は行われるが、ネットワークにおけるいかなる発話も対象を指示することはない。したがって、空名「シャーロック・ホームズ」を含む文 (1*) ~ (3*) は、以下のネットワークに対する言及を含むとみなされる (Perry 2012, pp. 185-86)。

- (1*) シャーロック・ホームズは存在する。
- (1#) N_{SH} は起源をもつ。
- (2*) シャーロック・ホームズは存在しない。
- (2#) N_{SH} は起源をもたない (=ブロックに終わる)。
- (3*) シャーロック・ホームズは探偵である。
- (3#) N_{SH} は起源をもち、かつ彼は探偵である。

「 N_{SH} 」はコナン・ドイルの創作から始まるネットワークを表す。ペリーのネットワークの理論に従えば、空名「シャーロック・ホームズ」はいかなる個体

も指示するのではないが、(1#) ~ (3#) のようにネットワークのレベルで真
理値評価を行うことができる。

しかし、物語などの虚構を語るには、真理と区別される「正しさ (correctness)」
の基準を定める必要がある。ペリーによると真理は事実との対応の問題であり、
正しさは規範的表現 (e.g. 『コナン・ドイル全集』) の内容との適合の問題で
ある。つまり、「シャーロック・ホームズは探偵だ」と述べることは、ドイル
の設定に適合する (正しい) が、真ではない。

このような虚構では、われわれは事実認識に相当する信念をもつことはでき
ない。しかし、われわれはシャーロック・ホームズについての信念や知識をも
ち、その伝達を意図することができるように思われる。ペリーによると、われ
われは現実の対象に対する信念 (事実認識) とは区別される態度を虚構に対し
てとっている。つまり、虚構を「信じるふり (pretend to believe)」をしている
のである。ペリーはこの態度を「p-信念 (p-believe) ⁽¹⁰⁾」と呼ぶ。

われわれの p-信念に対する正しさの規範的基礎として機能するのは、シャ
ーロック・ホームズの場合では、ドイルの著作群である ⁽¹¹⁾。このような p-信
念の内容は、ネットワーク・レベルで保持される。(ドイルのオリジナルの物
語の文脈内で) ホームズを議論すると想定しよう。

(4) ホームズはワトソンの勇気を称賛した。

ドイルの規範において (4) が適合するのは、(4) を述べるか、含意する言
明があり、(4) と矛盾する言明がない場合である。このような場合、(4) は規
範に適合する (正しい) とみなされる。

このようにペリーは、空名を使用する場面に即し、ネットワークとブロック
によって、空名の指示対象が現実には存在しないにもかかわらず、われわれは
なにかを述べることができる、ということを明らかにする。ペリーの基本的ア
イディアは、空名を含む発話は、意味論的には内容をもたないにもかかわらず、
語用論的にネットワークへの言及を含む内容を表現するというものである。ペ
リーは、われわれは空名を使用してなにかを伝え、理解しているのか、現実世界

に存在しないものについてわれわれがコミュニケーションできるのか、という問題を明らかにする「虚構の言語哲学」を考察していると言えるだろう。ペリーの理論の射程は、われわれの言語的コミュニケーションの場面に限定され、空名を用いて人間がなにを想像するのか、なぜ人間は空名を含む言語をもっているのか、ということはまったく論じることはできない。このことを論じるためには、虚構（フィクション、表象体、芸術作品）をめぐる人間がどのように活動しているかを検討しなければならない。この問題はウォルトンの中心的課題である。したがって、われわれは空名を使用してなにをおこなっているのか、ということを明らかにする包括的な虚構の哲学を構築するためには、ペリーの理論は理論的基盤としては満足いくものであるが、その理論的射程を見据える必要がある。すなわち、ペリーの理論を補完するためには、ウォルトンの理論を必要とするのである。

III 虚構の共同性

ペリーのフレームワーク上で展開されたウォルトンの理論は、ウォルトンの理論に含まれていた虚構の共同性を浮かび上がらせることができる。ウォルトンはみずからの立場を次のように概括している。

「プロップは、慣習化された生成の原理の力によって、想像の仕方を命令する物体である。想像するように命令された命題は、虚構的命題である。与えられた命題が虚構的であるという事実は、虚構的真理である。虚構世界は、虚構的真理の集合と結びついている。虚構的なものは、与えられたある世界——たとえば、ごっこ遊びの世界や、表象的芸術作品の世界——において虚構的なのである。」

(Walton 1990, p. 69, 邦訳 70 頁、強調原文)

ウォルトンの虚構の哲学の顕著な特徴は、物体が想像の仕方を命令し、このような命令を発することが物体の社会的機能である、という点である。物体に媒介された創造活動の共同性という現象が、ウォルトンの理論の核心である。そ

の背景には、われわれが様々な物体を介して想像が作り出す虚構世界を同調させながら社会生活を送っている、という基本的事実がある(田村 2013, 31 頁)。

ペリーのフレームワーク上で展開されたウォルトンの理論では、マイノンダ主義や可能世界意味論などの虚構の実体化戦略が想定する虚構的对象にコミットする代わりに、言語活動の社会的・歴史的ネットワークを導入し、歴史的・社会的事実 (historical-social fact) の集合にコミットする。この歴史的・社会的事実、条件付き共指示の連鎖によって形成されたネットワークによって担保されている実在物とみなされる。われわれは、この歴史的・社会的事実をプロップとして用い、それらが発する命令 (生成の原理) に従って、想像や行為を行っているのである。このことは、虚構の実体化戦略が存在者へのコミットメントによって確保するコミュニケーションの可能性を、ペリーのフレームワーク上で展開されたウォルトンの理論ももちうることを示す。このように、ペリーのフレームワーク上で展開されたウォルトンの理論は、虚構に対する指示を、歴史的・社会的事実を用いたごっこ遊びと解釈することにより、虚構的对象に対する存在論的コミットメントを回避することができる。

ウォルトンの見解を敷衍すれば、空名 (を含む創造活動) を使用する人びとがその時点でインプリシットに抱いている生成の原理によって、空名のネットワークがどのように形成されるべきなのかが命令されることになる。これにより、空名の使用がでたらめにならず、ネットワークの展開が説明することができる。つまり、ある空名の発明者は、その発明者が生きている時代と社会にすでに蓄積されている物語を語ること (storytelling) の慣習的規則 (conventional rule) に対して、インプリシットに従っているのである。もちろん、慣習的規則を大きく逸脱することも可能であり、発明者には大きな自由があるが、そのような場合でも、その社会の物語を語ることの慣習的規則は準拠枠 (frame of reference) として機能し続けている。

たとえば、コナン・ドイルがシャーロック・ホームズを創作した場面を例にとろう。通常、われわれは、コナン・ドイルがシャーロック・ホームズを創作し、それから読者はホームズにかかわる解釈ごっこ遊びをすることができると

考える。しかし、このように考えることは、コナン・ドイルがホームズを創作する場面で、虚構的キャラクターを実体化していることになる。つまり、創作後にごっこ遊びが始まるのではなく、すでに創作の場面でインプリシットにごっこ遊びが始まっているのである。コナン・ドイルは、同時代の社会の中で保持されている様々な慣習的規則に従い、シャーロック・ホームズという架空の探偵を想像する。その慣習的規則に従うことによって、コナン・ドイルは自身の想像した物語を読者に伝えることができる。慣習的規則には、日常の生活において自明視され、意識されない規則（買い物するときにはお金を払うなど）や、いわゆる小説作法や文法、小説のジャンル（信頼できる語り手によって述べられたことは、虚構世界で起こっているなど）も含まれる。コナン・ドイルの物語の中で「シャーロック・ホームズは探偵である」と言明されるとき、われわれは、シャーロック・ホームズなる人物がいて、その人物は事件を調査し、推理する探偵である、ということを理解する。これが可能となるのは、コナン・ドイルが従う準拠枠としての慣習的規則にわれわれもまた従うからである。

このような準拠枠としての慣習的規則は、社会事実 (social fact) と密接に関連する。サールは、社会的事実を、生の事実 (brute fact) ⁽¹²⁾ と制度的事実 (institutional fact) とに分類する。

「太陽が地球から 9300 万マイル離れているという事実のような生の事実と、クリントンが大統領であるという事実のような制度的事実は、区別する必要がある。生の事実は、どんな人間たちの制度とも独立に存在する。制度的事実は、人間達の制度の中においてのみ存在できる。」

(Searle 1995, p. 27)

コナン・ドイルの物語の中で「シャーロック・ホームズは探偵である」と言明されるときに、われわれが探偵というものを理解するのは、探偵という現実世界での制度的事実を反映し、依拠している。虚構作品の中には地球防衛軍など、架空の組織や設定が登場することもある。しかし、その場合でも、制度的事実として成り立っている現実の軍隊に依拠して、われわれは虚構を理解し、場合によっては作り出すことができる。

サールが生的事実と制度的事実を分類するのは、社会的事実の構成基盤のひとつとして集団的志向性 (collective intentionality) を取り扱うためである。集団的志向性は、社会組織を構成する個人と個人をつなぎ合わせる心の共同性である (中山 2004, 2 頁)。生物体が細胞からなるように、社会組織は多数の個人からなる。生物体を構成する細胞と細胞をつなぎ合わせる原理が相互作用と相互依存を可能にする物質代謝にあるならば、社会組織を構成する個人と個人をつなぎ合わせているのが集団的志向性である⁽¹³⁾。サールは、社会的事実を、集団的志向性をまきこんでいく事実と定義する (Searle 1995, p. 26)。このような集団志向性と社会的事実との関係を説明するために、中山は、「二人で一緒に散歩に行くことなども社会的事実となる」という例を挙げる (中山 2005, 112 頁)。

サールの定義に従えば、われわれがごっこ遊びに参加し、虚構を想像することもまた、社会的事実である。ごっこ遊びは、複数の個人が共同的行為を行うという意図をもつことによって成り立つ。たとえば、タロウとハナコが泥団子をチョコレートにみたてるごっこ遊びをしているとしよう。タロウとハナコは、お互いが泥団子をチョコレートにみたてているということを理解し、またそのことを理解しているということを理解している。この集団的志向性によって形成された共通基盤 (common ground) の上にごっこ遊びは成立する。ウォルトンは以下のように述べる。

「集団的な想像 (collective imaging) と私 [ウォルトン] が呼ぶ社会的活動は、想像されるものにかかわる単なる一致以上のものを含んでいる。違う参加者が多くの同じことを想像するというだけではなく、それぞれの参加者が、自分の想像していることをほかの人々も想像しているということがわかっており、またそれぞれ、ほかの人々がこの点をわかっていることがわかっている。さらに、こういう一致が成立していることを確かめる手続きも成り立つ。そして、それぞれの参加者は、出来事が適切に進行する限りで、ほかの人々が想像しそうなことに関して、理由のある期待を抱き、正しい予測を行うことができるのである。」

(Walton 1990, p. 18, 邦訳 17-18 頁、下線部は引用者による。)

このウォルトンの集団的想像の説明は、集団的志向性のサールの定義と極めて近い発想に基づき、虚構を想像することの共同性と社会的事実の側面を捉えている。この共同性を説明する際に鍵となるのが、上記引用の下線部にあたる部分である。この下線部は、相互信念 (mutual belief) と呼ばれるものに相当し、トゥオメラは以下のように定式化する (Tuomela 2002, p. 34fn.)。

- (IA) x と y が p という相互信念をもつというのは、両者が p という信念をもつとともに、相手も p と信じているとお互いに思い、場合によっては、これが無限に続くということである。
- (RA) x と y が p という相互信念をもつというのは、両者が p という信念をもつとともに、 p ということが両者によって相互に信じられているとき、かつ、そのときに限る。

前者 (IA) は反復的説明 (iterative account) と呼ばれ、後者 (RA) は反射的説明 (reflexive account) ないし不動点的説明 (fixed-point account) と呼ばれる。信念についての合理性の規定を加えると、相互信念についての無限に続く反復的説明から、反射的説明が帰結することをトゥオメラは示唆する (Tuomela 2002, p. 35, 中山 2004, 115 頁)。トゥオメラはここから、サールの集団的志向性を精密にした「共有されたわれわれ-態度 (shared we-attitude)」を導出する (Tuomela 2002, p. 39)。

- x が p というわれわれ態度をもつのは次のことが成り立つときである。
 - x が p という態度をもち、さらに x が次のことを信じている。
 - すべての人が p という態度をもち、さらに、すべての人が p という態度をもつということが、グループ G の相互信念となっている。

前述の泥団子をチョコレートに見立てるごっこ遊びをしている子供たちの例にもどろう。ごっこ遊びに参加しているハナコがタロウに泥団子を指さして「あのチョコレートは美味しい」と言ったとしよう。この場合、ハナコは「泥団子=チョコレートごっこ遊びにおいて、あのチョコレートは美味しい」というごっこ遊び信念 (make-believe) をもち、さらにタロウもまた同じ信念をもち、このことが泥団子=チョコレートごっこ遊びの参加者集団の相互信念とな

っている。ここでは、ハナコとタロウは、ごっこ遊び信念という、共有されたわれわれ態度をもつ。

先に述べた「歴史的・社会的事実」は、この観点から理解することができる。空名の使用をする社会的事実、条件付き共指示の連鎖によって形成されたネットワークを形成し、われわれはそれに従って空名を使用する。ハナコとタロウのケースでは、「あのチョコレートは美味しいよ」というハナコの発話を受けて、タロウが「チョコレートを食べすぎると虫歯になるよ」と発話したとしよう。彼らの発話に含まれる「チョコレート」は、現実世界ではいかなるチョコレートも指示しないため、空名である。しかし、彼らの泥団子=チョコレートごっこ遊びのなかでは、虚構としてのチョコレートを指示する。タロウは、ハナコの発話に含まれる「チョコレート」と同じものを指示しようと意図し、ハナコの「チョコレート」の使用と因果的に接続されるネットワークを形成する。このとき、ハナコとタロウのあいだでは、チョコレートにかかわる虚構が、社会的事実として成り立っている。彼らは、さらにこのチョコレートにかかわる虚構という社会的事実をプロップとして用いて、新しい想像をしたり、伝達を意図したりすることができるのである⁽¹⁴⁾。

むすびに

以上のように、本稿ではウォルトンのメイクビリーヴ説をペリーのフレームワーク上で展開する試みを議論してきた。ウォルトンは、美学と芸術鑑賞の理論を構築するために、プロップと生成の原理によって命令されたメイクビリーヴという概念によって、人間の虚構を作り出す想像力を説明する。つまり、ウォルトンは現実世界に存在しないものについてわれわれがコミュニケーションできるのかという問題から出発し、われわれが虚構ゲームをするための想像の力を明らかにする、「虚構の哲学」を探求する。ウォルトンの虚構の哲学の顕著な特徴は、物体が想像の仕方を命令し、このような命令を発することが物体の社会的機能である、という点に他ならない。すなわち、物体に媒介された想像活動の共同性という現象が、ウォルトンの理論の核心である。その背景に

は、われわれが様々な物体を介して想像が作り出す虚構世界を同調させながら社会生活を送っている、という基本的事実がある（田村 2013, 31 頁）。ペリーのフレームワークは、この社会性を条件付き共指示のネットワークという構造化の付与を可能とする。これにより、ウォルトンの理論は、芸術鑑賞の理論にとどまらず、社会性・共同性一般の理論として展開することが可能となる。

本稿の議論は、ある空名の使用し、なにかを想像する際に、その使用者は、生きている時代と社会に蓄積されている社会的事実に対してインプリシットに従っていることを示唆した。もちろん、社会的事実として存在する設定から大きく逸脱することも可能であり、想像には大きな自由があるが、そのような場合でも、その社会の中で物語を語ることの慣習的規則は準拠枠として機能し続けている。この準拠枠を捉えることこそ、「虚構の哲学」の目的であり、われわれが検討してきたペリーのフレームワーク上で展開されたウォルトンの理論は、その目的を果たしうるだろう。

参考文献

- Evans, G. (1982) *The Varieties of Reference* (edited by J. McDowell). Oxford: Clarendon Press.
- Donnellan, K. (1974) Speaking of Nothing, *The Philosophical Review*, Vol. 83, No. 1, pp. 3-31.
- Searle, J. (1995) *The Construction of Social Reality*. New York: Free Press.
- Perry, J. (2001 1st. ed. /2012 2nd. ed.) *Reference and Reflexivity*. Stanford: CSLI Publications.
- Walton, K. (1990) *Mimesis as make-believe*. Cambridge, Mass: Harvard U. P. 邦訳『フィクションとは何か ごっこ遊びと芸術』田村均訳、名古屋大学出版会、2016年
- 田村均 (2013) 「虚構制作の根源性——ケンダル・ウォルトンの虚構論」『名古屋大学文学部研究論集・哲学』第59巻、1-34頁
- 中山康雄 (2004) 『共同性の現代哲学——心から社会へ』勁草書房
- 成瀬翔 (2014) 「空名の指示の理論と現代フレーグ主義の可能性」博士論文 (名古屋大学)
- (近刊 a) 「虚構の社会——メイクビリーヴ説の社会哲学への応用」日本福祉大学編『全学教育センター紀要』第5号

脚注

- (1) 名古屋大学文学研究科博士研究員、e-mail: sho.naruse1987@gmail.com
- (2) その代表例がマイノング主義である。マイノング主義は特殊な対象の導入や虚構の対象が存在する可能世界を要請することによって空名を一挙に説明しようと試みる。
- (3) 同様の見解は萌芽的にはエヴァンスによって主張された (Evans 1982, p. 368)。
- (4) ウォルトンは「信じることにする (make-believe)」という術語を「ふり (pretense)」と交換可能な仕方で用いる。
- (5) ウォルトンの説は、その内容に即するなら「ごっこ遊び説」とも呼べるだろう。
- (6) 「prop」には、「(演劇や舞台などの) 小道具」という意味もあるが、同時に「支柱」という意味もある。ウォルトンはこの語に〈ごっこ遊びを成り立たせるための小道具〉という意味と、〈(それなしには成り立たない) ごっこ遊びを支える柱〉という意味を込めている。したがって、以下ではこの両義性を表すために、「プロップ」という訳語を当てる (Walton 1990, pp. 38-39, 邦訳 38 頁)。
- (7) *ibid.*
- (8) しかし、ウォルトンは「公認されたゲーム (authorized game)」と「公認されていないゲーム (unauthorized game)」を区別することにより、個人的な設定によるごっこ遊びの可能性を認めている (cf. Walton 1990, p. 51, 邦訳 53 頁)。なお、ゲームの「権威づけ」という区別は厳密なものではなく、どのゲームが権威づけられたゲームとして認められるかは、時代や文化などによって左右される流動的かつ可変的なものである。
- (9) 後者の話者が前者の話者と同一の指示をしようと意図せずに発話した場合でも、結果的に共指示となる場合がある。
- (10) ‘p’ は ‘pretense’ の頭文字である。
- (11) 「シャーロック・ホームズ」の使用は、コナン・ドイルによる規約によって確立され、われわれが遭遇する「シャーロック・ホームズ」のすべての使用は、ドイルの創造によって始まった起源のないネットワークの一部である。そして、ドイルの著作のなかのシャーロック・ホームズの設定を元に、映画の台本やパロディが生み出される。このような二次創作はドイルの規範に必ずしも忠実である必要はなく、許容可能な限りで改変が加えら

れる場合もあるが、このようなケースではローカルなサブ・ネットワークが形成される。

- (12) ここでの「brute fact」は「野蛮」や「粗野」という意味ではなく、「art brut」という芸術用語が「文化的・制度的ではない美術（作品）」を示すように、制度的事実と対比される意味での、「制度化されない事実」を意味する。
- (13) サールの集団的志向性の分析と、それに対するトゥオメラの批判については、中山 2004, 112-117 頁が詳しく検討している。
- (14) 「シャーロック・ホームズ」や「サンタクロース」のケースもまた、ネットワークにおいて保持される社会的事実としての虚構である。われわれは、空名を発話し、ごっこ遊びの参加者集団の中で、社会的事実としての虚構を確立する。空名の使用は、個人が単独で想像する場合も、準拠枠に従ってネットワークに参入し、社会的事実を参照するという意味では、社会的な共同行為である。たとえば、ジョンがマイケルに「いい子にしていたらサンタクロースがプレゼントをもってきてくれるからね」と発話したとしよう。それから、マイケルが「サンタクロースがクリスマスにゲームをもってきてくれたらいいのになあ」と一人で想像している場面を考えてみよう。マイケルは、「サンタクロース」という空名を使用しているが、マイケルは先行するジョンの発話との共指示をインプリシットに意図している。つまり、マイケルは、ほかの人々が述べているのと同じものを指示しようと意図し、「サンタクロース」を使用する。このインプリシットに指示を意図する想像によって、マイケルは空名「サンタクロース」の使用にかかわる社会的なネットワークに参入する。個人的な想像の場合、集団的な想像と異なり、集団的志向性や共有されたわれわれ態度は成り立たないが、その場合でもわれわれはすでに確立された社会的事実を参照し、それを準拠枠として用いて想像を行うのである。